



# 匠の面



川崎ゆきお

「魂とは何でしょう」

「霊とはまた違うんでしょあ」

「魂を込めて作った作品とかありますねえ」

「あるねえ」

「鉄砲の弾を詰め込むようにでしょうか」

「心身に込めるんでしょあ」

「魂を」

「そうだね」

「じゃ、作品には魂はもう入ってないのですね」

「魂を込めて作ったから入っておる」

「魂が入っているとは、怖いです」

「魂の籠もった作品とも言うねえ」

「じゃ、作品に魂が」

「そうそう」

「じゃ、作った側の魂は、消えるのですか。作品に移って」

「まあ、丁寧に、手抜きしないで、しっかりと作ったってことでしょ」

「精魂込めてって言いますしね」

「そうそう。だから、精魂ではない魂もあるということだな」

「ほう」

「私の人形は良い人形というコマーシャルソングがあった。人形屋のね。これを怖いと言った人がいる」

「え、どこが」

「だから、良い人形があるのなら、悪い人形もあるってことだ」

「それは、品質の問題じゃないのですか。うちで作っている人形は良質な人形だと。そのかわり少し高いと」

「これが人形だからいけない。カメラならいいし、服でもいい。人形だから、良いの意味が違ってくる」

「品質ではなく」

「悪さをしたり、化けたり、ややこしい異変を起こすカメラや服の話はあまり聞かないが、人形にはそれがある。人形にまつわる怪談は結構ある。だから、悪い人形も存在するんでしょあ。これは品質の問題じゃない。それこそ、魂のようなものが入ってしまったのだろうねえ。髪の毛が伸びるとか、寝る前に置いた位置と違ったところにいるとか、表情が変わるとか」

「だからですよ。魂の入ったものは怖いのです」

「ほう」

「下手に扱うと怖い」

「魂入りですからなあ」

「そうそう。だから魂を抜いた状態でほしい」

「何を」

「作った人のです」

「まあ、それは言い方なので、気になさらずに」

「それで、この能面なんですが」

「はい」

「きっと先生は丹精込めて、精魂をかたむけて彫られたと思うのです」

「いやいや、それは型で作りました。粘土です」

「そうなんですか、木のように軽いですか」

「これには魂を込めてませんから、大丈夫ですよ。抜く必要はありません。最初から手を抜いてますからね」

「じゃ、安心ですねえ。魂なしで」

「そうです。しかし、こう言うのは乗りやすいから、あなたも注意しないと」

「ただのお面でしょ」

「人形は顔が大事です。その顔だけを抜き出したのが、この能面です」

「注意というのは焼き物なので、落としたり割れるとという意味ですか」

「それも大事ですが、他のものが乗り移ることもありますので」

「居酒屋のアクセサリとして壁に掛けて大丈夫ですか」

「誰かが念を送り続けると危ないかもしれません」

「誰が」

「客でも店の人でも」

「念と魂は違うでしょ」

「念が固まれば、塊になり、魂に近いものになります。ただの土塊ですがね」

「また、怖いことを」

「あなた、それを期待して、買いに来たのでしょ」

「はい、多少は」

「まあ、良い面になるのも、邪悪な面になるのも、持ち主次第」

「はい、心がけます」

面作りの匠から言えば、匠の魂を込めたものは、それが一種の魔除けになり、あらぬものから守るらしい。

どちらにしても面妖な話だ。

了